

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4290101460		
法人名	社会福祉法人 神楽会		
事業所名	グループホーム夕陽が丘		
所在地	長崎市大浜町543番地5		
自己評価作成日	令和5年2月26日	評価結果市町村受理日	令和5年9月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	令和 5年 5月 19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは、「何もしない」事を大切にしながら利用者の方々と生活をしています。「何もしない」とは、ホームや職員が作ったルールに当てはめないという事です。今までの生活習慣や生活のリズムを大切に、9名の方が9通りの生活を送られています。「大家族をつくろう」を理念としており、利用者、家族等、職員が喜怒哀楽を共にしながら、本当の家族のような関係が築けるよう努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人理念「大家族をつくろう」は利用者・家族・職員を家族とみなし、職員は「自分の親だったら」という視点に立ち、職員間でも家族同様に助け合うなど理念の具現化がみえる。今年度より法人内施設を巡回する専属の看護師が就き看護体制を強化しており、看取り支援の実績もあることから、万全な医療支援は家族の信頼に繋がっている。コロナ禍においては、感染状況の緩和をみて面会を条件つきで再開し、対面で母の日を祝うことができるなど家族との絆を第一に支援している。更にICT化により、タブレットを活用した介護日誌に加え、薬剤師や医師に発信し情報共有を進めており、介護事業における先駆的な取組は特長といえる。法人のバックアップ体制と職員のチーム力を発揮しながら介護の努力が窺えるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	大家族を作ろうの理念のもと、その人らしさ、人とのつながりを大切にする介護方針をつくり、職員は就業前には理念を読み上げ勤務を開始し、理念の実践に取り組んでいる。	法人理念「大家族をつくろう」と、基本方針5項目を掲げており、職員は就業前に理念を読み上げ、出勤簿と理念チェックシートを同時に付けるなど、理念の意識付けにおける工夫が見てとれる。職員は「自分の親だったら」という視点に立ち接しており、職員間でも家族同様に助け合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入している。昨年度と同様にコロナウイルス感染予防のため、法人からの指示もあり、必要なとき以外は事業所への来所は控えて頂いている。近隣にあるお店よりキーホルダーを利用者様にプレゼントされたこともある。利用者様も喜ばれていた。	自治会に加入しており、職員が回覧板を回している。コロナ禍以前は地域の清掃に職員が参加し、祭りには利用者も参加しており収束後は再開予定である。また、敬老会の折は小中学生から手紙が届くなど継続した交流がある。介護の困りごと等地域住民が訪れ、相談窓口となっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治会や地域ネットワーク会議にて、介護の相談窓口を設けていることの発信を継続している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の現状を報告行っている。2ヶ月に1回と定期的開催できている。昨年度と同様にコロナウイルスの影響で、事業所内で職員、利用者で開催。市へは書面での報告を行い、市役所担当者より助言を頂いている。	コロナ禍のため昨年度に引き続き書面会議で対応している。利用者の活動報告、今後の活動予定等を掲載した会議報告書を行政へ届けている。ただし、他の運営推進委員である地域住民代表等には配付していない。また、質疑・応答の項目にも記載が無い。	書面会議においても、全ての運営推進委員に議事録を配付し意見交換を行い、サービス向上に活かしていくことが望まれる。更なる意見等の抽出の工夫に期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事業者内での加算になど不明な点での問い合わせ行っている。運営推進会議はコロナウイルス感染予防対策で、事務所のみで開催だったが、行事の写真などを送付して、市に報告を行っている。	行政からオンラインによる研修の案内があり参加している。コロナ禍ではマスクや抗原検査キットの配付を受けている他、日頃から運営における手続きや不明な点を問い合わせている。また、市の担当課の職員から定期的に電話連絡があるなど協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月本部にて身体拘束廃止委員会開催している。各部署で事案の報告を行い、他事業所の事例も取り入れながらケアを行っている。不適切なケアもその場で注意しあえる、職員同士の関係性もできている。	毎月法人本部にて開催する身体拘束廃止推進委員会に管理者が参加し、その後ホーム内に検討内容を報告している。法人内研修や毎月の職員会議で勉強会を開くなど、身体拘束をしないケアに向け周知・理解を図っている。言葉による拘束に繋がる声掛けはその都度、管理者が指導している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人研修にて虐待に関する研修を行っている。施設での虐待つながらる言動や行動がないか、職員会議で自身のケアを振り返っている。職員からも日々の業務の中で今の言動が虐待であったのではないかとその場で確認し合える環境にある。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年度も外部研修に参加予定だったが、事務所内でのコロナ感染があり参加できなかった。来年度は多くの職員が権利擁護研修に参加できるように、オンラインでの参加も検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前には疑問、不安に思っている点の確認を行い、契約している。契約に関する疑問や不安は聞かれていない。オンライン面会にについての、個人情報の管理に関する同意書も家族より頂き、すべての利用者家族とオンラインにて繋がっている。加算についても新たに取得するものにはすべて同意書を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からの意見要望は、申し送りやSNSを利用し情報共有を行っている。家族意見に関しては職員、管理者、本部にて検討し必ず家族の意見を尊重している。家族とSNSでも繋がっており、写真送付や確認事項で活用している。	利用開始時に重要事項説明書をもとに苦情解決の流れ等説明している。コロナ禍では、面会の要望が多く、抗原検査後に面会できる旨を伝えている。更に、全家族とLINEで繋がっており、行事は当日に写真を送り好評である。また、自宅に連れて行きたいとの要望を検討し、支援する予定である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議を毎月1回開催し、職員同士の意見交換を行っている。参加できない職員に対しては、事前に意見を聞き、反映しくみ作りをしている。日々の業務の中でも改善点やケアの見直しがないか、平等に意見の聞き取りを行っている。	毎月、理事長が事務所を訪れ、職員の困りごとなどを直接聞き取っている。ハード面での課題は迅速に解決している。管理者は、気になる様子の職員に声を掛け面談しており、課長兼ケアマネジャーに伝え、理事長とも情報を共有している。管理者は、職員の要望を反映することで、働き甲斐のある環境となるよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	本部の代表者と管理者による話し合いを月1回行っている。職員の意見を尊重している。他事業者からの応援にて、希望休など柔軟に対応できている。職員が家族との良好な関係を作るため、楽しく勤務できる環境を心掛けている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人職員入社には、本部からの協力的な意見が多く、日勤帯や夜勤帯の2人体制などで細かな指導を行うことができた。新人職員の教育もあるが、すでに働いている職員への教育も再度行うことができた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に所属している。同業者と交流する基礎はできている。今年度はオンラインでの研修もあり、参加できる機会も増えた。来年度も積極的に参加していきたい。		
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用開始までの間に、必ず本人や家族と面会し困っていること、不安なこと、要望等を本人と家族の意見を確認するようにしている。かかりつけ医を継続するか、施設の提携医にお願いするかなど、入居前に説明を行い不安がないようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	緊急時の対応を含む、確実に連絡がつく時間帯などの確認を行っている。電話連絡のみの場合は、家族が緊急と思われることも多く、SNS利用により話しやすい、相談しやすいと喜ばれることが多い。SNS導入後は、受診時間などの双方が確認しやすく、予定の確認に役立っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談の時点で、グループホーム利用が適切でない場合や満床の場合は、法人内の各事業所などに連絡相談を行い入居可能なサービス、入居の提案を行っている。同一法人内での横の繋がりが構築されている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「大家族をつくろう」を理念としており、暮らしを共にする者同士として利用者、スタッフで喜怒哀楽を共にし支えあう関係を築けるよう常に努めている。利用者同士で体調が悪いときなども「○○さんは大丈夫？」など心配される家族のような繋がりがあがる。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	「大家族をつくろう」という理念のもと、本人と家族、職員も含めた絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築けるよう常に努めている。コロナ禍で大変な時期ではあったが、看取りの際なども、柔軟に面会など行っていた。遠方に住まれている家族にはテレビ電話が喜ばれている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	希望される方には入居前からの利用している、かかりつけ医を継続して受診してもらっている。iPadによる経過記録を導入しており、日頃のバイタルや様子もすぐに印刷でき、医療機関に提供できる環境がある。往診可能な病院が増えたことにより、家族や職員の負担が軽減されている。	今年4月から家族の面会について人数や時間の制限をなくしている。2ヶ月に一度、美容室の訪問美容があり、料金は法人負担で整容を整えている。3年間自粛していた家族と法事等に出掛けたり、自宅に帰宅するなどが実現するため、本人・家族が喜んでいる。馴染みとして、好きな歌を歌ったり、新聞や読書を楽しむ姿も見える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士で会話されることが多い。時には喧嘩され、職員が仲裁に入ることがあるが、家族のような賑やかな関係が構築されている。朝は夜勤者1人のため、洗濯物を取り込まれ「置むよ。」と協力して下さる方もおられる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去された家族から「ここの施設は良かった。」と紹介され、見学に来られる方もおられた。退去後も連絡されることもあり、必要書類への記入依頼などもお願いされることがあった。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	行事やレクリエーションなどの、強制的な参加は行っていない。同じ月に誕生日の方がいる場合も、誕生日会はまとめて行わず、誕生日にそれぞれお祝いさせて頂いている。面会禁止の状況であるが、家族様が来所され、プレゼントを持参されることも多い。	本人の様子に合わせて、起床や就職は自由である。本人の好みの化粧水や乳液を揃えたり、衣服も朝から希望を反映している。職員は居室で一対一で会話しており、本人の意向を傾聴している。表出困難な場合は、目の動き、表情から推し量り支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始前に家族や本人と面談行い出身地、好きな物、本人が望むことの確認行い、書類作成し職員間の周知を行っている。聞き取りした内容で、話をすると「よく知ってますね。」と笑顔も見られる。経過支援記録にも、本人との会話の中で分かったことを記載し、ケアに役立てている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	「大家族をつくろう」という理念のもと、利用者との信頼関係を築きながら、現状把握に努め、現状情報は経過支援記録、申し送りやノートで職員全員が共有できるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	面会中止の期間が長く電話やSNSを利用し、職員により現状報告を行っている。意見を頂き、本人を含めての課題やケアの見直しを行う。職員での話し合い、申し送りノートやSNSを活用し、職員会議や申し送りにて検討内容を話し合い、介護計画へ反映している。	月1回の職員会議において、利用者のモニタリングやカンファレンス、計画作成にかかる会議を開催し全職員で検証している。介護日誌などタブレットを活用し効率化を図っている。ただし、介護計画の見直しにおいて、家族の意見や要望、多職種の意見などを介護計画に反映するにあたっては、検討の余地がある。	コロナ禍により、家族へは郵送や電話連絡が主となり、対面での聞き取りが難しい中であるが、意見や要望を聞き取る工夫が望まれる。また、医師など、多職種の意見も反映し、現状に即した介護計画を作成していくことに期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	iPadを使った経過記録を継続して行っている。提携医への電話連絡の際に、皮膚の状態などメールで写真を送信できるようになっており、提携医への負担軽減や効率化が可能となった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	職員会議や申し送りの際に、その方に必要な福祉用具、物品の検討を行っている。本人が必要な物を家族に相談し、金額を伝え了承を頂いた後に導入するようにしている。金銭的に難しい場合は、本部と相談し金額の調整などを依頼し、利用者の負担が増えないよう心がけている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の把握に努め、安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望する医療を提供している。毎日かかりつけ医に、医療連携にてFAXしており、医療的な支持をもらっている。入居前より受診している、かかりつけ医を受診してもらい、利用者や家族が不安のない環境を作っている。	かかりつけ医を継続でき、基本的に通院は家族対応である。複数の協力医が定期的に往診している。タブレットで服薬情報を薬剤師と共有し管理している他、医療機関とも画像を共有し、利用者の状態変化に対応するなどICT化を進めている。今年度から法人内施設を巡回する専属の看護師が就き、緊急時オンコール体制も構築している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	他事業所の看護師に依頼している。週に1回看護師による利用者の状態確認行っており、支援経過記録への記入も行っている。ちょっとした体調の変化も報告し、ケアに役立っている。看護師とも良好な関係が築けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には問い合わせを行い本人に状況確認行っている。退院時も不安な事あればすぐに問合せ行い、かかりつけ医にも相談行っている。入院時には必ず家族にも同席してもらい、家族、職員共に不安がないよう心掛けている。コロナ禍で病院の受け入れ先が、見つからないこともあった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	面会禁止ではあったが、看取りの際は施設で検査を実施し、入室可能とし面会して頂いた。「良くして頂いて本当にありがとうございました。」と家族が喜ばれることが多くあった。特別な場合などの面会は、状況に応じて柔軟に対応している。	利用開始時、重度化や看取りについて家族と指針を共有し、承諾書・事前確認書を交わしている。昨年1例の看取り支援を行っており、コロナ禍で家族に検査等感染対策を実施し入室を許可するなど家族に寄り添い支援している。看取り支援後は職員会議で振り返り、法人内研修では看取りをテーマに開催する等積極的に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時などのマニュアル作成行っており、連絡手順など記載している。どの職員でも対応できるよう工夫を行っている。各医療機関や家族の緊急連絡先も掲示、iPadにも緊急連絡先を記載している。緊急時は誰でもすぐに対応できる体制ができている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	今年度もコロナウイルスの影響で消防立合いでの訓練は自粛した。避難訓練は毎月行っている。	今年度はコロナ禍の為消防署の立会いは中止となっている。毎月、自主訓練を実施しており、毎回火元を変更し、毛布やシーツなどを使った避難訓練を実施するなど現実を想定した訓練を徹底している。また、立地条件から豪雨や地震災害を想定した訓練も盛り込みホーム周辺の環境整備も行っている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応に関しては、すぐに注意指導を行っている。必要に応じて課長、管理者も含め当事者に聞き取り面談も行った。その後は言葉遣いに対する、職員の意識が変わってきている。毎月の職員会議でも不適切な事がないか検討している。職員同士でもすぐに注意できる環境ができています。	母体法人は権利擁護研修を行い、職員に対して利用者の人権に配慮した支援を指導している。職員は、利用者への呼び掛けは苗字にさん付けであり、排泄チェックは本人に気付かれず職員で共有するよう配慮している。家族の個人情報の同意書、職員の守秘義務の誓約書を保管しており、ファイルや送付は部屋番号で統一している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の要望など聞く際は、自室又は事務所内で行うようにプライバシーに配慮している。 職員が言いにくいことなども、管理者が代弁行っている。すぐに解決することで利用者とのストレスがない関係作りを心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員が作った決まりはない。利用者それぞれが好きな事を行い、好きな時間に自室やリビングにて休まれている。行事も定期的に開催しており、すべての利用者が参加している。SNSにて家族に写真を送付も継続して実施している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	無料にて散髪サービスを行っている。体調が悪く散髪できなかった方も、美容室の方が「いつでも呼んで下さい。」とその方だけ別日に散髪行うこともあった。散髪の様子も、一人ひとり写真撮影を行い、家族へ送信している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	以前残されていた食べ物を経過記録に記載し、本人に好き嫌いを確認している。「味の辛いとさ。」と言われたこともあり、提供前に量の確認などを行っている。残すことが申し訳ないと思われる方もいるので、注意して提供している。本人の嚥下状態も確認し食事形態の見直しも行っている。	利用者に合わせてムース食やペースト食にも対応する配食業者を選定し活用している。ホームでは、季節感を大切にしており、折々に合わせて端午の節句には鯉菓子を食べたり、夏には寒天を手作りしている。誕生日会は、本人の名前と祝いの垂れ幕を下げ、ケーキで祝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	タブレットの経過記録に変更行っている。水分量も自動で計算もでき、1ヶ月単位での確認やグラフの作成もでき、体調管理に役立てている。 水分量の記入を忘れる職員もあり、経過記録への記入を指導、徹底する必要がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	1日に2回、口腔ケアを行っている。訪問歯科による指導なども実施。本人の状態に合わせスポンジブラシなど使用している。看取り時期の口腔ケア指導も行ってもらった。訪問歯科による嚥下評価も必要に応じて行い、食事形態の変更の助言や主治医への相談も随時実施している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の排泄時間と量をiPadで記録している。利用者の能力や状態、排泄パターン、習慣を把握して、排泄の自立へむけた支援を行っている。その方にあったパッド類を随時見直し行っている。	利用者一人ひとりの排泄状況はタブレットにて記録し職員間で共有している。記録から定期的に声掛けしたり、利用者の表情や仕草を見て誘導している。布パンツで過ごす人もいる他、リハビリパンツとパッドの利用については検討し、本人が快適に過ごせるように配慮している。夜間にポータブルトイレを使用した際は、都度洗浄している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	支援経過記録に水分摂取量の記入行っている。ブリトルスケールも活用し、職員間での排便状況の確認に役立っている。タブレットでも自動で排便の日数が記録されるので、排泄の状況確認出来ている。便秘が続く際は、すぐに主治医に相談し、指示をもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	木曜日以外を入浴日とし、毎日入浴実施している。寝たきりの方には、清拭などで対応。無理はせず、その日の体調に応じた支援を行っている。入浴時に体調悪い場合は、すぐに主治医に相談を行うことを徹底している。	週に6日、入浴の準備をしており、利用者は週に2、3回入浴している。入浴拒否の場合は、声掛けを工夫するなど、無理強いすることなく支援している。大多数の利用者がシャワー浴を好む中、季節には菖蒲湯やゆず湯を提供している。職員の要望を受けて、今後リフト浴の設置を予定している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休みたい時に、自室や和室で横になり過ごされている。食事の時間なども体調に合わせて、時間をずらすなどで、利用者負担が内容になっている。急な体調不調の際は、和室で休んでもらうなど、安全も考慮し対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬情報を利用者別にファイル整理しており、職員それぞれが効用や副作用等を確認できるようにしている。薬の変更情報は、往診記録、申し送りにて職員全員が確認できるようにしている。錠剤などの服薬が難しい場合は主治医や薬剤師に相談し、粉碎可能なものは対応お願いしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の能力に合った役割分担をしている。嗜好傾向や楽しみごとを把握し、その人らしい生活を過ごせるように支援している。ハサミを使った作業などを好まれる方もいるので、危険な作業などもあるが、特別に使用の制限なども行っていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルスのため外出支援は自粛した。面会の制限などもあったが、タブレット端末使用し、オンライン面会を実施している。庭に桜の木を植えることを、密かに計画している。	コロナ禍で外出が困難であった時も、玄関先の花壇でチューリップ等の花を愛でたり、プランターには紫陽花やひまわりを育て、季節の花を楽しんでいる。また、近隣公園に花見に出掛けたり、回転寿司で外食を楽しんでいる。今後は、法人の福祉車両を使用して外出を計画している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	紛失等のトラブルの原因となるため、金銭の所持は許可していないが、必要物品や嗜好品の購入には制限を設けていない。購入はホームにて立替払いを行い、後日、利用料金と共に請求している。購入の前に、家族等に了解を得ている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望される時に支援行っている。電話を掛けたい利用者については、時間の制限も行っておらず、家族にも電話の了承頂いている。テレビ電話を使ったオンライン面会も多用している。家族以外の方から電話があることもあった。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングには大きな窓があり、窓の外には庭や自然の草木見える。建物の向きを工夫して直射日光は午前中の限られた時間しか入らず、不快な光が入らないようにしている。車道より高台に建物があるため、車の騒音も気にならない。	ホームの中庭に職員がチューリップや紫陽花を育てており、大きな窓越しに季節の草花を眺めることが出来る。リビングはフロアと小上がりの畳の間があり、畳の間を好む利用者などそれぞれの場所を過ごしている。ただし、利用者のお大半はフロア中央の長机において、車イスの状態が長く、車イスでの暮らし方に関しては、課題が残る。	居心地の良い毎日の暮らしを支援する観点から、車イス利用者のリビングでの暮らし方の工夫が望まれる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	日中は和室に座り、話をされている利用者が多い。夜間なかなか眠れない方などは、夜間でも共有スペースでテレビなどを見て過ごされている。利用者が他利用者の部屋を訪れ、会話されることもあった。部屋の行き来なども制限していない。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が使い慣れた家具など、危険物以外の持ち込みには制限を設けていない。居室では居心地よく過ごしていただけるよう支援を行っている。入居時や利用後も本人のADLを確認し、福祉用具の導入も適宜行っている。	持ち込みは自由で、仏壇や遺影がある他、趣味のカメラで撮った写真や手芸を飾ったり、DVDプレイヤーで踊りを鑑賞したりするなど自宅同様に居心地よく暮らしている。コロナ禍での面会制限が解除となり、家族が母の日に訪れ贈った植木花が居室を彩っている。職員は清掃や寝具交換、ベッド周辺の整理整頓など環境整備に努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	何がどこに入っているかすぐにわかるように、タンスにテープを貼っている。転倒リスクを軽減するため、動線の見直しなども、すぐに検討しすぐに対応するように心がけている。		